けいおん!!　忘れられた暗号文と宝物

クリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！！　忘れられた暗号文と宝物

【Ｎコード】
Ｎ０７７５Ｒ

【作者名】
クリア

【あらすじ】
２年生のある冬の日の放課後、唯達に軽音部の部長である律から１つの暗号文を解読して欲しいと頼まれた。
そして、この暗号文を作ったのは驚く事に当時小学６年生の律と澪が作った事が分かった。そして、この暗号の答えの先にはそんな彼女等の宝物である「４つの太陽」があるという。
はたして、唯達はこの暗号を解く事が出来るのであろうかっ！！

第1章

放課後、暖かいコートに身を包み、冷たい空気に包まれている廊下を元気良く走る平沢　唯の姿があった。その背中には自分より大きいギターケース背負い、手には自分の鞄を持っているためか息がかなり荒い。

目指す場所はバンド仲間が集まる音楽室である。唯は軽音部に所属しており、音楽室が部室となっているのだ。

階段を急いで駆け上がると向かって左側に音楽室の扉が目に映った。　唯は音楽室の扉の前で少しだけ休んで呼吸を整えると、その扉を開けて元気良く挨拶した。

「皆～、おまたせ～・・・」

すると音楽室の中から軽音部で唯一の後輩である中野　梓の声が聞こえた。

「あっ、唯先輩。こんにちは」

梓はそう言って手に持っていた自分のギターをギター・スタンドに掛けて近づく。

「おぉ、あずにゃん。　会いたかったよぉ～」

唯はいつもの様に梓に抱きつこうとするが、綺麗に避けられた。

「唯先輩の事だから、近づくとこうなると予想できましたからね」

唯を見ながら、梓は冷たくそう言い放った。

「うへぇん、あずにゃんが反抗期になった～」

唯は悲しそうにそう言うが、梓は「何言ってんですか・・・」と言って呆れた表情を浮かべた。

「・・・それはそうと皆は？　私は日直で遅くなったけど、他の皆は私より早くここに来たと思ったんだけど」

唯は皆でお茶やお菓子を食べる時に使うテーブルに腰を下ろしながら梓にそう聞いた。

「えっと、澪先輩とムギ先輩はトイレに行って、律先輩は忘れ物があると言って教室に戻りました」

「ふぅん・・・澪ちゃんとムギちゃんはともかく、りっちゃんとは廊下で会わなかったからすれ違いかな・・・」

そう言いながら、唯は手馴れた手つきでギターを弾く準備をしていた。今年のライブは終了したので次の公演まで期間があるのだが、唯自身は毎日ギターを軽くでも弾いていないとコード等をすぐに忘れてしまうのだ。

そのため家でも欠かさず練習しているのだが、皆と練習する方が唯は好きなのである。

「それじゃ、唯先輩。　今日もビシッと練習しましょう！！」

ギターを弾く準備をする唯の姿を見た梓は、気合を込めた口調でそう言って自分のギターを取りに向かった。

「えぇ～、ビシッとじゃなくて気楽にやろうよ～・・・それにムギちゃんのお菓子も食べたいし～・・・」

「駄目ですっ。　唯先輩、今日の私は甘くありませんよ」

「うぅ、あずにゃんが本当に反抗期だ・・・」

今日は何たる不運だろうか・・・唯は密かにそう思った。
実は練習よりも紬の美味しいお菓子が目的だと言いたかったが、こんな可愛い後輩にそんな非常識な言葉は流石の唯も言えなかったのである。
渋々、愛用のギター（通称ギー太）を持って梓のいる所へ歩き出そうとしたその時であった。

「皆～、いるか～！？」

扉が勢い良く開いて、聞き慣れた高い声が音楽室に響き渡った。
軽音部の部長である田井中　律の声である。

「あっ、律先輩。こんにちは」

梓が唯の時と同じ様に挨拶するのだが、律は無視して音楽室の中に誰がいるのか確認している様である。

「りっちゃん、良く来てくれたねっ！！」

唯は目をキラキラと輝かして、律の手を握る。理由は勿論、律が来た事で練習が中断する可能性が出たからである。

「・・・なぁ、澪とムギはどこにいるか知ってるか？」

「あっ、その2人ならトイレだよ」

「ふぅん・・・」

「どうかしたの？」

「いや、ちょっとな・・・」

そう言って困った表情をする律を唯はじっと見つめた。

「・・・何かあったの？　もしかして、また澪ちゃんと喧嘩とかしたの？」

唯は心配な気持ちを込めて律にそう聞いた。　それを聞いた律は、慌てて手を横に振って「違う違う。全然別な事だよ」と言った。

「ならいいんだけど・・・・・・りっちゃん、私はいつでもりっちゃんの味方だからねっ！！」

唯は律の手を握り、少しだけ力を込めた。　律はチラリと握られている手を見て、困った表情を浮かべていた。

「律先輩・・・私も唯先輩と同じですっ」

梓も私と同じ様に言うのだが、律はさらに困った表情になってし

まった。

「あ～、心配してくれるのは大変嬉しいんだけど、澪とは喧嘩してないから。　それに今回は唯達にも頼るつもりだから」

その言葉を聞いた唯と梓は、嬉しそうな表情で互いを見た。　一方の律は、臭い言葉を言ったせいか、少しだけ頬を染めていた。

「それでりっちゃん、私達に何を聞きたかったの？」

唯は頼られて嬉しいので明るくそう聞くと、律は「ちょっと待ってな・・・」と言って自分の鞄の中をあさり始めた。

「ええっと・・・確かこの辺にっと・・・あっ、あったあった」

そう言って律は見た目からして古そうな一枚の紙を鞄から出して、唯達の方に差し出した。唯と梓はその紙を律から受け取り、紙を見てみる。

その紙にはまるで子供が書いたかのような幼い感じの文字でこう書かれてあった。

『律と澪の宝物　「４つの太陽」のありか

場所は、２０－３＝？　２５－５＝？　３０－１９＝？　１８－５＝？　１４－２＝？　だよ。

季節は冬で、時間は夕方４時丁度』

唯と梓は互いにキョトンとした表情で見つめた後に律を見た。

「実はこの暗号を皆に解いて欲しくてさ・・・」

律はそんな2人に恥ずかしそうにそう告げた。

第1章（後書き）

初めての推理小説なのでまだ分かりませんが、お願いします。
ただ、感想に暗号の答え等は書かないで下さい。ネタバレをしたりされたりするのが一番嫌なのでｗｗ

第2章

トイレから帰ってきた澪達も混ざり、早速律が持って来た例の暗号文をテーブルの上に置き、解読する作業に入った。
しかしながら、この暗号文は予想以上に良く出来ており、唯達は解読開始から僅か15分足らずで詰まってしまった。

「う～ん・・・さっぱり分からないぞ・・・」

椅子に座りながら律が背伸びをしてそうぼやいた。
りっちゃん、早くも飽きたな・・・、律の行動を見て、唯は密かにそう思った。しかし、それは唯だけでは無くて、他のメンバーもすでに分かっているのだ。

「飽きるのが早いぞ、律」

軽音部のメンバーの中で一番綺麗で可愛くて怖がりである秋山澪は律に呆れた口調でそう言った。

「だって、私は頭で考えるのが苦手なんだもんっ」

「苦手ってお前なぁ・・・」

澪は律に軽い説教を始めた。一方の律は「はいはい、あ～分かった分かった」と適当に相槌をしている。
いつもの様に夫婦喧嘩が始まったのだ。そんな中、残り3人のメンバーはいつもの事なので無視して暗号文をじっと見ていた。

「梓ちゃんは、この暗号解けた？」

軽音部のメンバーで一番のお嬢様である琴吹　紬が暗号文をじっと見ながら梓に尋ねた。

「う～ん・・・私には分かりませんね・・・ムギ先輩は？」

「私も分からないわね・・・唯ちゃんは？」

「私？　私は分かったよ」

『えっ！？』

軽音部のメンバーが驚きの表情で私を見た。先程まで賑やかだった部室が、しんと静まり返る。

律が恐る恐る私に聞いてきた。

「分かったって・・・この暗号がか？」

「うん」

唯がそう答えると、律はさらに驚愕の表情をする。

梓は口をパクパクとお魚さんの様に開いては閉じてを繰り返し、澪は何かをボソボソと呟いていた。

私ってもしかして天才かなっ、律達の行動を見て私はそう思い、気分が凄く良くなっていた。

「凄いわ唯ちゃん！！」

紬が目を輝かして唯の両手を握ってきた。

「それで、この暗号の答えは何なの？」

早く早くと言わんばかりに紬は唯にそう質問してくる。

「答えは『ちとさすし』だよっ！！」

「・・・ちとさすし？」

「うんっ！！　答えは『ちとさすし』だよっ！！」

唯は元気良く暗号の答えを言った。

けれど、周りからは拍手の嵐は聞こえずに不気味な静寂だけであった。。

皆の表情は「あ～・・・・」と言いたそうな表情で唯を見ていた。

「あっ・・・・れ・・・？」

周りの変化に気がついた唯は、徐々に恥ずかしくなってきた。

「・・・もしかして唯、この暗号に書かれている計算を解いて、あいうえお表に照らし合わせた？」

律の言葉を聞いて、私は驚いた。

「・・・唯、申し難いんだけど・・・その答えにはみんなたどり着いているから。そんでもって絶対に違うから」

「えっ！？」

またやらかした！！
唯はそう悟った。

「うわあぁぁぁぁ！！　物凄く恥ずかしいぃぃ！！」

部室内では唯の叫び声、そしてその心の中ではアホウドリの鳴き声がほぼ同時に響き渡っていた。
顔が燃えるのでないかと思う位に熱く感じ、そんな表情を両手で隠しながら私は思わずその場にしゃがみ込む。
そんな唯の行動を見た律がやれやれとした仕草をしていたのは見えたが、他のメンバーがどんなリアクションを取ったのかは分からない。
そして、話が勝手に進んでいく。

「さて、話を戻すけど・・・現段階でこの暗号が解けた人は挙手して～」

「・・・誰もいないわね」

「そうですね・・・律先輩はともかく、澪先輩とムギ先輩の2人が解けないなんて・・・」

「梓～、一言多いぞ～？」

次の瞬間、グリグリという音と梓の叫び声が聞こえた。

「いっ、痛いです律先輩っ！！」

「そうか～、もっとグリグリをやって欲しいか～」

「いたっ、いたたたたっ！！」

「梓～、私に対して何かいうんじゃないか？」

「いたたたたたっ！！　ごっ、ごめんなさい、律先輩っ！！」

「ふむ、許そう」

律がそう言うと、グリグリという音と梓も叫び声も聞こえなくなった。

そのかわりに気持ちのいい音がりっちゃん周辺から聞こえた。

「こら律っ、後輩をいじめるなっ！！」

「それ、一番破壊力のあるやつだよ澪・・・」

律が痛そうに頭を抑えて蹲る姿を唯は指の隙間から見た。未だに唯の心の中にはアホウドリが鳴いている。

「それに唯もいつまで落ち込んでいる気だ？」

「そうよ、唯ちゃん。失敗は成功の元、誰も初めから上手くいかないわ」

「澪ちゃん、ムギちゃん・・・」

２人の優しくて暖かい言葉が唯の心の中に響き渡り、やる気がぐんと出てくるのが分かった。そして唯はゆっくりと立ち上がるのを見たメンバーは、優しく微笑んでいる。

「さてと、この暗号に再び挑戦するぞっ！！」

『おー！！』

こうして唯達は再び暗号と正面から向き合ったのである。時間は思っていた以上に経っているが、まだ最終下校までは時間がある。

やれるところまでは私も頑張ろう・・・唯は1人勝手にそう決心した。

第3章

「・・・なぁ、暗号解読は一時中断しないか？」

「えっ！？どうしてなの澪ちゃん！！」

「現段階ではこの暗号を解く鍵が無いんだ。だから律、この暗号文を発見した場所を聞きたいんだけど・・・いいか？」

澪がそう言うと、律は「別に良いよ～」と気前良く承諾した。
いつも以上に真剣な表情になっているとみんなを見て分かった唯は少しだけ緊張した。

「昨日、私の部屋を掃除していて、クローゼットの中を覗いたら、古い箱がある事に気がついたんだ。何だと思ってその箱を出して開けてみたらこの暗号文が出てきたって訳」

「ちなみにその箱はどれ位古かったの？」

唯が質問すると律は「そうだなー、大体だけど5年以上前だと思うぞ」と曖昧な答えを言った。

「5年以上前っていったらすごい昔ですね・・・まるでタイムカプセルみたい」

「梓、それは褒めているのか？　それとも私の部屋が汚い事を侮辱しているのか？」

「いっ、いえ！！　侮辱しようなんて考えてませんからっ！！」

右手を力の限りブンブンと横にふる梓を見て、律は少しばかり気を悪くした様である。

「でも律、なんでそのタイムカプセルは5年以上前だと具体的に分かるんだ？」

話がずれまいと強引に澪が律に質問した。

「え～とだな・・・確か、暗号文のほかに小学6年生の名札が入っていた」

「小学6年生の名札？それは本当か？」

「あぁ、本当だよ」

律がウンウンと自分の言った言葉に頷く。その話を聞いた澪は何か分かった様子であった。

「だとすれば・・・この暗号を書いたのは小学6年生だった可能性が高いな・・・」

『ええっ！？』

澪の発言に唯達は驚きを隠せなかった。唯達でも解けていないこの暗号が、まさか小学6年生の律によって生み出されたのだ。

それはつまり、私達は小学6年生の律に負けているという世にも恐ろしい事実である。

「そんなのありえませんよっ！！　だって律先輩がこんな難しい暗号を書くことなんて・・・いててててっ！！」

いつの間にか律が梓の背後に回り込み、グーの状態になった両手で梓の頭の側面を万力の様にグリグリと締め上げていた。

「梓～、先輩に対して最近口が悪いぞ～？少しだけ反省が必要だな～」

「いたたっ、ごごごごめんなさいっ！！」

立ち上がっている梓が必死に謝ると律はすぐにやめて、自分の席へ戻っていった。

「ううっ、今日で二回目です・・・」

「自業自得だ」

律がキッパリとそう言った。

梓は締め付けられた箇所を押さえ、痛そうな表情で座りなおす。

「でもこの暗号文のタイトルには『律と澪の宝物』って書かれているから、もしかして澪ちゃんも関連してるんじゃない？」

紬がそう言うと、澪は頷いた。

「恐らくな・・・正直律だけでこの暗号を書くことなんて『１００％』不可能だからな」

「そこを強調するなっ」

律が怒るけど、澪は再び「悪いけど律だけじゃ不可能だ」と言い切った。

「でもさあずにゃん、あの理由を聞いただけで何故か納得しちゃうよね」

「はい・・・律先輩と澪先輩のコンビでなら納得です」

澪の話を聞いている唯と梓がヒソヒソと話す。すると律がコホンと咳払いをして、ニッコリとした笑顔で唯と梓の事を見た。

明らかに笑っていない表情だ、そう分かった唯の背筋に寒気が走るのを感じ、梓との会話をすぐに終らした。

「あ～、また話がずれたから元に戻すぞ」

そう澪が言うと紬がすぐさま挙手をした。りっちゃんが「何か分かったか、ムギ？」と質問するけど紬は顔を横に振った。

「まだ暗号は解けていないけど・・・りっちゃんと澪ちゃんに質問で、この暗号の事覚えていないの？」

「う～ん・・・あたしは覚えていないな～・・・」

「残念ながら私もだ」

「そう・・・それじゃ再び質問だけど、りっちゃんと澪ちゃんが小学６年生の時にどこの公園で遊んでいたのか教えて欲しいんだけど・・・」

紬の意味の分からない質問に周りはキョトンとしてしまった。
少しだけ重くなった空気に気づいたのか、紬は苦笑いをした。
「えーとだなムギ・・・その質問の意味は何だ？」
律が分からないと言っている表情で理由を聞く。紬は少しだけ恥ずかしそうに話した。
「え～とね・・・何となくなんだけど」
「何となくかいっ！！」
律がそう怒鳴ると紬は「ごめんね、りっちゃん」と謝った。
しかし澪はこのままでは話が進まないと思ったのか「分かった、書いてみるよ」と快諾して、メモ用紙に公園名を書いていった。
下の『』内に書かれているのが、メモ用紙に澪が書いた公園名である。
『1、鷹の森公園。2、鶴が丘公園。3、梅の花公園。4、菊野川公園』
「まぁ、こんなものだな」
澪がそう言って書いたメモをムギちゃんに渡す。唯と梓と律の3人が、紬の後ろから覗いてそのメモを読んだ。
「あ～懐かしいなぁ・・・最近これらの公園に行ってないや」
律が懐かしそうな表情でそう言うと、澪も「私も書いていて懐か

しいと思ったよ」と言って微笑んだ。
そんな時、メモ用紙を見た梓がこんな質問をした。
「どうでもいい話ですけど、律先輩と澪先輩はこの時にどんな遊びをしていたんですか？」
そう質問された澪は「ホントどうでも良い話だな・・・」と言って苦笑いをした。
けれど律は、メモ用紙に先程書かれた懐かしい公園名を見たせいか、鮮明に思い出したようで楽しそうに語り始めた。
「私達が小学6年生の時の遊びか・・・よく公園でボール遊びをしていたな」
それを聞いた澪も思い出したのか、クスリと笑いながら語り始めた。
「そうそう、公園にある遊具や私が持って来たボールを使ったりしたなぁ・・・」
それから2人は堰を切ったように思い出話を語り始めた。そして他のメンバーも暗号を解く事をやめて、2人の話を聞く事に集中し始めた。
「そういえば澪ってさ、かくれんぼで隠れるのが苦手だったよな」
「こっ、こら律！！　人の過去を他人に教えるなっ！！」
律がニヤニヤしながらそう言うと、澪にも覚えがあるのか恥ずかしそうな表情で言った。

「それでりっちゃん、澪ちゃんは何で隠れるのが苦手だったの？」
ここまで聞いたら知りたくなる、そう思った唯が興味津々に質問すると律は笑いながら答えてくれた。
「あ～ほら、澪って極度の怖がりなのは知ってるだろ？　ただ単純に1人で隠れるのが怖かったんだ。だから隠れる時は私と手を繋いでいつも隠れていたんだよ」
「へぇ、澪ちゃんってやっぱり小学6年生から可愛いんだねぇ・・・」
唯はすぐさまにかくれんぼの時に律と手を繋いで一緒に隠れる澪の姿が目に浮かび、思わず頬が緩んでしまった。
唯の言葉を聞いた澪は顔を真っ赤にして過去をばらした律に怒鳴り、説教を開始した。けれどいつもの様に律ははいはいと苦笑しながらそれを流していく。
「あの～、話をもどしませんか？」
梓が困った表情でそう言うと、澪が「そっ、そうだぞ皆！！　また話がそれてるっ！！」と怒鳴った。
律はそんな澪を見て「誰のせいだ、誰の」と苦笑いして言った。
「何か余計に遠くなった気がしますね・・・」
「それは言わない約束よ、梓ちゃん」
梓と紬は真剣な表情で暗号を見つめながらそう言った。そんな中、

律が「そういえば・・・」と言って唯の方を向いた。

「唯が黙っているのに今気づいたけど、何か分かったのか？　それとも今日の『あれ』が未だに効いてるのか？」

律の言葉を聞いて唯自身も気づいたので、何て答えようかと考えていたら律がニッコリと笑って「まぁ、どうでも良い事だけどな」と言って再び暗号文の方を向いた。

唯はやや複雑な気持ちになりながらも深く考えない事にした唯は、暗号文を見つめなおした。約5年以上も忘れられたこの暗号文はやや変色しているがまだ保存状態は良い。

そんな時、ふとこんな考えが頭の中によぎった。

今日に至るまで、この暗号文はどんな気持ちだったのであろうか

――――

本来、暗号とは大切な物を他人から守るのに作られたものである。それが大事であればあるほど、暗号の難しさは高くなるのが普通だ。

この暗号もそれと同じで、小学6年生だった澪と律の2人が本当に大切だと思ったからこそ、こんな難問になっていると思われる。

しかし、今の律と澪は暗号の解き方や隠した宝物が何なのかを忘れてしまっている。それ以前にこの暗号文の存在自体を忘れているのだ。

一度も解こうとする者も現れず、終いには製作者にすら忘れられた暗号文を待っていたのは箱の中に眠る事だった。

けれど、ゴミとしてこの世を去った方が暗号文にとって、ある意味幸せだったのではないだろうか。

そこまで頭の中で考えた唯はその場で軽く頭も左右に振った。

いけない、いけない。今考える方向はこの暗号文を解く事だ。暗

号文の気持ちなどを考えてる場合じゃない。
唯は自分にそう言い聞かせて、やや変色した暗号文を再びジッと見るのであった。

第4章

暗号文解読から一週間が経過した。暗号解読は進まず、あの日から2日前ほどで公園の名前の件は却下されて、別の道になったのだがそれでも分からなかった。想像を超えた作業に軽音部のメンバーが次々と挫折していった。

軽音部で頭が良い澪と紬も脱落した中で、唯だけが必死に食いついていた。

「ねぇ、澪ちゃん。例の暗号文はなかなか解けないね」

「あぁ、まったくだ。暗号を作った本人である私と律もすっかり解き方を忘れてしまったからな・・・」

部室に向かっている間に唯と澪は、今回の暗号文の話をしていた。唯が楽しそうに話す中、昨日も同じ会話をされた澪は少しだけ飽きた表情で聞いていた。

「ねぇ、澪ちゃん。やっぱりあの暗号文は『言葉』だと思うんだ」

「言葉って・・・唯が最初に言った解き方の事を言ってるのか？」

「うん・・・あれが一番しっくり来るというか、馴染むっていうか・・・」

唯が曖昧な言葉で言っているのを澪ちゃんは困った顔で見ていた。

「唯、それは先入観ってやつだよ。その解き方はみんながチャレン

ジしたけれど、それでも謎が解けないじゃないか」

「それは・・・そうだけど・・・」

「それに私達は暗号を解く事よりも大切な事があるんじゃないか？」

澪の言いたい事、それは唯達が軽音部という部活動をやっており、新入生歓迎会へ向けて練習しなければならないという事だ。

特に今年は唯達が卒業してしまい、梓が1人になるかならないかという重大な意味も含まれているのだ。

唯もそれが一番重要だと分かっているため、何も言い返せなかった。

「それにあの暗号はもともと律が暇つぶし程度に持ってきた物だし、3年生になってからでも遅くはないさ」

「うん・・・そうだね・・・」

唯がそう言うと澪は肩をポンと叩き、「まぁ、解けなかったのは残念だったな」と言って、部室のドアを開けるのであった。

今日の練習は最悪だった。唯は帰り道、ずーんと重い空気を身に纏っていた。

暗号文の事と梓の事、それが唯の頭の中でごちゃ混ぜになり、軽い頭痛を感じながら練習をしていたのだ。

本当にそれで良いのだろうか・・・あの暗号を解かなくて。

唯は、ギー太を引きながら、ずっとそう考えていた。

確かに暗号を解く解かないは自由だけど、唯はあの暗号を解いて宝物である4つの太陽が何なのか知りたいと思っていたのだ。

それは、唯があの暗号を初めて見た時からずっと思い続けていた

事なのだ。
けれど、周りの皆はどうもそうは思っていないらしい。仮に思っていたとしても、考える時間が勿体無いと思ってやめているのである。
そして、この日を堺に唯だけがあの暗号をずっと考えているのであった。

暗号解読から2週間が経過した。
唯1人の頭脳ではどうにもならないのは分かっていたが、ついに限界が来たようである。

昨日、唯は律にやんわりとだが怒られてしまったのだ。理由はいたって簡単、唯が練習に集中していないからである。
どうも唯は1つの事にしか集中できない体質らしいので、暗号解読とバンド練習を続けるのは事実上不可能というわけである。
しかもその日、律が申し訳なさそうな顔で「あんな暗号を持ってきた私が悪いな・・・」と謝ったのだ。
集中力が放散していた唯が悪いのに、律が謝るのは筋違いというやつなので、唯は律に謝ると共に暗号解読をやめる決心をした。

そして現在は、学校帰りを1人で帰っていた。
今日は久しぶりに集中してやったのか、かなり疲れていた。ギー太の入ったギターケースがやけに重く感じる。
けれど、そんな時に限って唯はあのやや変色した暗号の事を思い出してしまった。
突然、頭の中が黒い靄が立ちこめ、軽い頭痛を感じる。
「う〜・・・私ってこんなに考える人だっけ？」
ボソリと自分自身に問いかけるが、答えは自分自身で良く分かっ

ている。
おかしいな・・・最近の私。
らしくない行動を考えてしまい、唯の頭の中に立ちこめる黒い霧がよけいに深くなった事を感じたので私は深いため息を吐いた。

「お姉ちゃん、最近どうしたの？」
家でいつもの様にごろついている筈なのに、妹の憂から心配する声が出された。
「うーん・・・ちょっとねぇー・・・」
寝そべってお菓子を食べながら唯が適当にそう返事をする。
「お姉ちゃん、具合とか悪くないよね？」
「大丈夫だよ、憂。私はこの通りピンピンしてるよっ」
そう言って唯は立ち上がって突然ジャンプを数回する。憂はそれが元気な証拠だと長年の付き合いで分かっているのか、ホッとした表情になった。
「良かったぁ・・・お姉ちゃんの具合が悪くなくて」
そう言って憂は、ソファに腰を下ろしてテレビを点けた。憂の行動を見た私は、壁に掛けられている熊の時計で時間を確かめた。
時刻は夜の8時ジャスト。憂がいつも楽しみにしている刑事ドラマの始まる時刻である。

いつもならワクワクとした気持ちで見れるけど、今ははあまり見たくない物であった。なので、唯はゴロゴロと床を転がって時が過ぎるのを待っていた。
そんな様子を憂は心配そうな表情で私を見ていた。

『左京さん、この暗号って何でしょうね？』

『さぁ・・・現段階では私にもさっぱり分かりません』

困った口調でそう言う刑事さんのある言葉に唯はピクリと反応した。それは勿論だが『暗号』という言葉である。

『しかし、この手の暗号は難しく書かれているけど、必ずある法則があるのです』

『ある・・・法則ですか？』

『そうです、例えばそれは私達が身近にある物や言葉でも簡単に作る事が可能なんですよ？』

言葉と身近な物・・・かぁ。
唯はごろりとまた転がり、日頃私達が触れている物や言葉思いつく限りで考えた。
ひらがな、カタカナ、英語、ローマ字・・・
洗濯機、冷蔵庫、ベット・・・
考えれば考える分、言葉や物が溢れてくる。ついに頭はパンクしてしまいそうになったので、もう考えるのをやめようとしたその時であった。

『例えば携帯の文字盤を使い、言葉を作ったとすれば、それも立派

な暗号だと思いませんかねぇ・・・・』

携帯の・・・文字盤？

ゆっくりとテレビの画面を見てみると、頭の良い刑事さんが右手の人さじ指だけを立てて、微笑んでいた。

携帯の文字盤・・・文字盤・・・文字盤っ！？

「あっ！？」

『あっ！？』

唯とテレビの中にいるもう1人の刑事さんが同時に叫んだのが分かった。

憂は突然私が叫んだ事に対してビックリしてしまい、キョトンとした表情で唯を見ている。

「分かった！！　分かったよっ！！」

唯の頭の中に雷が落ちたかの様な衝撃が迸った。それは大変気持ちが良く、いつの間にか黒い靄が綺麗サッパリ無くなるほどである。

急いで自分の部屋に入り、机の上に置いてあったメモ帳を1枚破った。そして、黙々と書くこと約3分の事であった。

「でっ・・・出来たっ！！　本当にできちゃったようっ！！」

興奮を抑えきれない唯は、次に携帯を持って律に電話をした。

数回のコール音の後に、「どうした、唯」と聞き慣れた律の声が聞こえた。

「りっちゃん、りっちゃん！！　あのね、あのねっ！！」

『おっ、落ち着け唯っ。そんなデカイ声で喋るなっ！！」

「解けたよ、りっちゃん！！」

『解けたって・・・何が？』

「暗号っ！！」

数秒間だけ沈黙が続いた後、律は大声で叫んだ。

耳がキーンとしたけど、今はどうでも良い事だ。唯は叫び声が聞こえなくなった後にこう言った。

「だから明日、私が説明するねっ！！」

律は弱弱しく「あぁ、そうだな・・・」と返事をして、電話を切った。

唯は嬉しくて仕方なかった。折角なので今日の日付をカレンダーに〇した時、立春の2日前だと分かった。

第5章

放課後、いつもの音楽室ならドラムやギターなどの賑やかな音が鳴り響くのだが、今日の練習は一時中断となっているためか、不気味なほど静かだった。

「それで唯、あの暗号が解けたって本当か？」

澪が心配そうな声で私にそう聞く。ふと他のメンバーの表情を見ると全員が凄く不安げな表情を浮かべていた事に唯は気がついた。

「うんっ、確認したけどバッチリだったよ」

唯が元気良くそう言っても、不安そうな顔は取り除かれなかった。ふうっ、と息を吸い込み深呼吸をして、暗号解読の方法を語り始めた。

「私は最近この暗号を解読する事だけをずっと考えていたんだ。お菓子を食べる時もテレビを見るときも、眠っている最中やギー太の練習中にも・・・」

「いやいや、寝ている時は考えられないだろう」

「それに練習に集中できなかったのは、やっぱりそのせいかっ！！」

「うぐっ・・・それは・・・」

澪と律の鋭いツッコミに唯は声を濁らす。

「唯ちゃん、唯ちゃん、早く推理の続きが聞きたい♪」

そんな中で紬は目を輝かせてそう訴えていた。唯はコホンと咳払いをして推理の続きを話した。

「でっ、では続きを話します。私はこの暗号文を見たときからある解き方ばかり考えていました。それは皆が分かるように『あいうえお順』で解く方法でした」

「でも、その方法は唯先輩だけじゃなくて私達でもやったけど、駄目でしたよ」

梓の言葉を聞いて、律がウンウンと頷く。

「それだけじゃ駄目だったんだよあずにゃん。言葉は他にも『カタカナ』や『英語』、『フランス語』でやる方法もあるんだよっ！！」

唯がそう言うと、澪が「ちょっと待て、唯」と声を出した。

「それは私達もたどり着いた答えだ。カタカナ、英語、フランス語・・・色んな国々の言葉で試したけど駄目だったんだぞ？」

その言葉を聞いて律達も反論した。

「そうだそうだー！！　調べるのにどれだけ苦労したかっ」

「私も律先輩と同じです。調べるのにかなり苦労しました・・・」

皆が反論してくる中、紬は黙って唯の事を見つめていた。　ああ

だこうだと反論が言われる中、唯はまた話し始めた。

「・・・そこは私も皆と同じだよ。でもね、私はその言葉の中で『アルファベット』に注目したんだ。皆知っている通り、アルファベットは２６文字あるんだけど、その１文字１文字に番号を付けたらこうなるよね？」

私はメモ帳にスラスラとアルファベットを書き、その横に数字を書いた。

下の『』内の文字とその横にある数字は唯がメモ帳に書いたものである。

『Ａ（１）　Ｂ（２）　Ｃ（３）　Ｄ（４）　Ｅ（５）　Ｆ（６）　Ｇ（７）　Ｈ（８）　Ｉ（９）　Ｊ（１０）　Ｋ（１１）　Ｌ（１２）　Ｍ（１３）　Ｎ（１４）　Ｏ（１５）　Ｐ（１６）　Ｑ（１７）　Ｒ（１８）　Ｓ（１９）　Ｔ（２０）　Ｕ（２１）　Ｖ（２２）　Ｗ（２３）　Ｘ（２４）　Ｙ（２５）　Ｚ（２６）］』

「そして、この暗号文に書かれている数式を解いた答えが『１７　２０　１１　１３　１２』になる。その数字をさっき紙に書いた数字に当てはめると『Ｑ　Ｔ　Ｋ　Ｍ　Ｌ』になるよね？」

「言われて見れば・・・そうなるなぁ」

「でもこの答えじゃ分かりませんよ？」

梓がそう反論すると、澪も少し苦笑いして言った。

「そうだぞ、唯。失礼に聞こえるかもしれないが、この考えに私や

ムギ、そして梓なら容易に考えつくだろ」

「確かにそうだね。でもさ、この言葉にはまだ裏があるんだ」

「えっ・・・」

澪が驚いた表情で唯を見た。

けれど唯はそんな澪を無視して、自分の鞄の中からある紙を出して、皆に配った。

「これは・・・パソコンのキーボード表？」

紬が不思議そうな表情でそう言うと、唯は力強く頷いた。

「今配ったのはムギちゃんの言う通り、パソコンのキーボード表です。そして、この表こそが暗号解読の鍵なんです」

その発言に皆は驚きを隠せなかった。

「解き方はいたって簡単、さっき数式を解いて導いたアルファベットを、このキーボード表で探してみると『たかのもり』と答えが導き出せるのですっ！！」

皆は唯の言葉を信じて試してみると、何と本当に『たかのもり』と導き出せて、びっくりした。

「ほっ、本当だ！！　本当に『鷹の森』だっ」

「唯先輩が本当に解いちゃったぁ！！」

梓と律はそう叫ぶ中、澪と紬はビックリ過ぎて声が出せずにいた。
そんな中、唯は得意げに笑っていた。
「どうどう、皆？　凄いでしょ？」
「あぁ、唯。良くやった！！」
そう叫んだ律が満面の笑みで唯に抱きついた。
「凄いです、唯先輩っ！！　見直しましたっ！！」
「凄いわ、唯ちゃん！！　そしておめでとうっ！！」
「あぁ、まったく凄いやつだよ、唯」
紬と梓と澪の3人は、嬉しそうな表情で唯を褒め称えた。
解いて本当に良かったっ！！　唯は心の奥底からそう叫んだ。
しばらく律と抱き合った後、唯はいそいそと荷物を片付ける作業を始めた。
そんな行為に皆はキョトンとしていた。
「ねぇりっちゃん、ここから鷹の森公園までどれ位かかるの？」
唯はそう律に尋ねながらも携帯を開き、時刻を確認していた。
「え～とだな・・・大体４０分ぐらいで辿り着くと思うよ」
律が曖昧にそう答えると、唯の企みが分かったのか徐々に顔を青ざめていく。

「まさかとは思うが唯・・・今から鷹の森公園に行く気か？」

「うん、そうだけど？」

素直にそう答える唯に対し律は額に手を添えた。澪に至っては「こら、唯っ」少しだけ怒鳴った。

「今日の練習はどうする気だっ！？」

「え～・・・だって折角解けたんだよ澪ちゃん？　今行かないと絶対に損だよ」

「駄目だっ、新入生歓迎会の為にも練習だけは絶対に休まないっ！！」

立ちふさがる澪という壁の大きさに唯は負けを認めざるを得なかった。

澪自身とて行きたい気持ちがあるのだが、梓のためにそれを封印しているのが簡単に分かったからである。

しかし、梓はこう叫んだ。

「いえ、今すぐに行きましょう！！」

「えっ！？」

梓の言葉を聞いて、澪と唯は酷く驚いた。そんな2人を見て、梓は「私も今すぐ見てみたいです、四つの太陽」と言ってニッコリ笑った。

澪と唯はしばらくポカンとしていた。その間にも紬と律は、準備を終らせていたようで2人の肩を優しく叩いた。

「あっ！！　りっちゃんにムギちゃん、ズルイよ！！　私も行く～！！」

そう言って、唯は2人の後を追いかけた。梓も唯の後ろを追うかのように部室を出て行った。

1人ポツンと残された澪は、急いで荷物とギターを持ち、彼等の後を顔を赤くして追いかけて行った。

第5章（後書き）

次回で一応完結します。

第6章

唯達は律と澪の案内によって、順調に鷹の森公園へと向かって行った。明日が立春だというのに、昼間でも相変わらず寒かった。

「そういえば律先輩、鷹の森公園ってどんな場所なんですか？」

梓が律にそう質問すると、律はう～んとうなりこう言った。

「実は私と澪、あまり鷹の森公園では遊ばなかったんだよ」

「えっ、そうなの！？」

唯がそう驚くと、澪は恥ずかしそうな表情でその訳を話した。

「鷹の森公園で遊んだのは小学校高学年になってからなんだ。そして、その場所で遊んだ回数も指で数えるほどしかないんだ」

律が「遠いんだよ、あそこの公園は」と言って苦笑した。唯と梓はなるほどと納得した。

「それじゃ、忘れたのも無理ないかもしれないわ。けれど・・・不思議ねぇ」

紬が言った言葉を聞いて、律は「何がだ？」と尋ねた。

「だって数回しか遊んだ事のない公園にりっちゃんと澪ちゃんの宝物がねむっているんですもの。そしてその事を本人たちは忘れて今

を生きていた。つまり私たちは今、宝探しをしているのよっ」

紬が興奮を抑えきれない表情で歩くのを見て、皆が納得した。

たしかに言われて見ればその通りだ。私たちはいつの間にか小学6年生の律と澪が作った宝の地図を頼りに、宝探しをしているのだ。

「うおおおぉぉぉぉ！！　私もワクワクしてきたぁぁ！！」

「私もだよっ、りっちゃん！！」

「私も3人と同じです！！」

「ずっ、ずるいぞ！！　私だってっ！！」

5人は一気にハイテンションとなって、宝物が眠っていると思われる鷹の森公園へと前進して行った。

そして目的地へとたどり着いたのだが、5人は公園の入り口で立ち止まっていた。ハイテンションはいつの間にか全員から消えており、ただただ冬の様な寒さに体を冷やすだけであった。

「これは・・・」

律が絶望したかのような表情で、公園の入り口前にある『建設予定地』と書かれた立て札に手を添えた。立て札のほかにバリケードがすでに公園一体を包み込んでいた。

「この公園に建物が建つのか・・・」

澪は寂しそうな眼差しでバリケードの網を握り、その奥を見つめた。他のメンバーは、2人に何と声を掛けたらいいのか分からず、

ただその場に立っているだけであった。

「私が知らない間に澪との思い出の場所は消えていくんだな・・・」

律は小さくそう呟いくと、澪はそんな律の肩に優しく手を置いた。何て悲しい表情をしているのだろうか・・・

２人を見て、唯はそう思った。

自分では暗号を解く事は出来ても、こればかりは私でも解決する事は出来ない。誰にでも可能、不可能がある。

けれど、やっぱり、思い出の場所が消えているのを実感するのは、無性に切なくて、悲しい・・・

唯は律達に声を掛けようとしたその時だった。

「みなさん、こっちに来てください！！」

突然、梓が大声で皆を呼んだのだ。いつの間にか梓は少しばかり離れた場所にいたことに唯は驚いたが、唯は梓の方へ向かった。

「どうかしたの、あずにゃん？」

唯がそう尋ねると、梓はチョイチョイとある場所を指で指した。そこは、１人分が通れそうな位にバリケードがずれているのだ。

「ここなら、私達でも入れそうですよ？」

梓がそう言うと、律が「良く発見した梓っ！！」と言って、梓の手を握った。唯もすかさず梓に抱きついた。

「ちょっと唯先輩、ここで抱きつかないで下さいっ！！」

そう叫ぶ梓だが、表情はどこか嬉しそうだった。

「よっし、行くわよみんな！！」

突然ムギちゃんがそう言って、バリケードを抜けて先へ行ってしまった。

「あぁ、ずるいぞムギッ！！　私だって！！」

律がそう叫びながらバリケードを難なく抜ける。けれど、残された3人はギターを背負っているために予想以上に手間をかけて、バリケードを突破した。

バリケードを抜けて少し走ると遊具があると思われる広い場所に唯たちはたどり着いた。けれど今は工事のために遊具はすでに撤去されて、その跡だけが生々しく目に映った。

これが公園の最後なんだ、唯はそう思うと目の前の光景にゾッとした。

「おーい唯、こっちこっち！！」

律が唯を呼ぶ声にハッと気がつく。少しばかり山になっている場所の頂上で叫ぶ律のそばに梓と澪の後姿が見えた。

唯だけが残されていたのだ。

「まっ、待ってよ～！！」

唯はそう叫びながら律達のいる方へと急いで走る。ふと空を見てみると空は少しばかり暗くなっており、日の入りが近い事を示していた。

荷物を沢山持っているせいで律達がいる場所にたどり着くと、ぜ

ぇぜぇと息を切らしていた。

「もうすぐ時間だわ」

紬の方を見てみると、ワクワクした表情で太陽を見ている。梓や澪、律も同じ様な表情で太陽を見ていた。

私も急いで太陽を見てみると、綺麗な赤になっている太陽が目の前に存在していた。

「綺麗・・・」

まだ太陽を見ただけなのに、素直にそう言ってしまうほどに太陽は綺麗だった。そして次の瞬間、目の前の光景に私たちはアッと驚いた。

左右のミラービルと下の方にある川に太陽が映し出されて、４つの太陽が目の前に映し出されたからである。

２つのミラービルと川の位置が、奇跡的に太陽と反射して作り出されたのだと、唯はすぐに分かった。

けれど、すぐさまに考える事をやめて、幻想的な４つの太陽を見る事だけに集中した。

それは軽音部や放課後ティータイムとしてではなく、とても大切な親友達と見たという思い出を心に刻むためである。

４つの太陽は僅か数分でその姿を消したのであった。

公園を出てからも唯達は興奮しながら帰り道を歩いていた。

「凄いですっ！！　私、感動しちゃいましたっ！！」

「えぇ、私も色んな光景を見て来たけれどこんなの初めてよっ！！」
梓と紬がそう言うと、律がしみじみとした声で言った。
「あぁ、私と澪は何でこんな素敵な光景を忘れていたんだっ！？
ホント、信じられないよ」
澪も「まったくだ」と言って、嬉しそうに頷いた。みんなが興奮する中で、唯だけが何も話さずにボケーとしていた。
「唯！！」
「ほわっ！？　なっ、何だいりっちゃん！！」
「何ボケーとしてんだよっ。唯が暗号を解読してくれなかったらこの景色を見ることが出来なかったんだ！！　本当にありがとなっ！！」
「あぁ、私も律と同じ気持ちだ。唯にはすっごく感謝している。よくノーヒントでいけたなと今でも信じられないが」
「あぁ、うん。ありがとね・・・」
曖昧な返事に皆は不思議そうな表情で唯を見つめた。けれど唯はまたもボケーと前だけを見ていた。
「どうしたんだ、唯。お前らしくも無い」
律が心配そうな表情でそう言うと、唯は少しだけ躊躇って言った。

「いやね・・・私達は澪ちゃんとりっちゃんのすっごい宝物を再び発見して・・・しかも発見までの道を導いたのが私ってが信じられなくて・・・」

それを聞いた瞬間にみんなは唯らしい答えにクスリと笑った。

「確かにな、唯にしては珍しいな」

澪がそう言うと、唯は「酷いよ澪ちゃ～ん」と少しうろたえながらも訴えた。その光景を見て、皆はまた笑うのであった。

けれど唯はそんな事に気にせず、こう言った。

「でもさ、私は今回の件である事を思ったんだよね」

「ある事って何ですか？」

梓がそう質問すると、唯はケンケンをしながら答えた。

「大人になるって、子供の時に見たり感じたりして素敵だと思ったことも忘れちゃうのかな～って。だとしたらさ、私は大人になんてなりたくないな」

その言葉を聞いた律は「確かにな～」と空を見上げながら言った。すると紬はクスリと笑いながら言った。

「確かにそうかも知れないわ。でも唯ちゃん、大人には大人の良い事があるんじゃないかしら？」

「そうかもしれないけど・・・大人って何か窮屈そうだよ？　お父さんを見て、私は毎回そう思うもん」

「それは唯ちゃんの先入観、大人にもすばらしい何かがあるのよ」

「そうかなぁ・・・」

「そうよ。でもそれが何なのか分からないからこそ、私たち子供はそれを知りたいが故に大人というものに憧れてしまうものなのよ。今回の様な宝探しの時みたいに冒険心に胸を弾ませてね」

その言葉を聞いた唯は紬を振り向いた。紬は優しそうな表情で唯の事を見ていた。

皆と別れた後、唯は1人で未だぼんやりとした調子で家に向かっていた。理由は分からないが、とにかくぼんやりとしたい気分なんだなと分かった。

「あの暗号・・・解けて本当に良かったな」

唯はふとそんな言葉を口にしていた。

あの暗号文は、約6年もの間を律の箱の中にいて、しかも2人の大切な宝物を守っていたのだ。これ程立派な暗号文に唯は今までに出会ったことは無かった。

けれど、その役目も今日で終了したのだ。宝物の場所はもうなくなるので、隠す意味が無くなったのだ。

しかし唯は相変わず、大人は損であると信じていた。あんなにも素敵な景色が見れる場所を消し、律や澪も成長したせいであれを忘れてしまったのだとすれば、尚更である。

大人の良い所を思い浮かべても、お金が沢山貰えて、結婚する事

以外にに思いつくことなんて無かった。
でも、自分を育ててくれたお母さんやお父さんは、娘の私が見ても、毎日が楽しそうで幸せそうな笑顔で生活をしているのを思い出すと、頭が混乱して訳が分からなくなる。

「答えは自分で探すしかないのかなぁ・・・」

唯は誰もいない道でそう呟いた。今度の宝物は、暗号という地図は存在しない。なので、見つけるまでは長い年月が掛かるのは唯でも分かる。
けれど紬の話を聞いて、それが何なのか知りたいと心から叫んでいる自分を抑えることなんて到底無理な話であった。

「まぁ、頑張ってみますかな」

子供の頃に見つけた素敵な物は所詮は過去、今を生きている私がそれを見つけても懐かしい程度にしか思えないであろう。
そんな宝物よりも素敵な宝物を見つけるために唯は、真っ暗な道を新しい冒険心を弾ませて歩いて行った。

あとがき

本当は、オリジナルの主人公で話を書こうかと思ったのですが、それはもう私よりも上手い方々がやっているので、やめました。同じ展開になるかもしれないし、私の場合はグダグダになって、物語が終らないままで放置になると思ったからです。

ならばこのサイトで誰も挑戦したことの無い「けいおん！」に推理系を混ぜて書こう、と決心して書いたのですが、推理系は難しくて頭を使いますね。当たり前だけど、書いてみてそれが凄く分かりましたｗｗ

でも書いてみると意外と楽しかったです。特に、単純な暗号を自分で考えて作る作業が一番楽しかった。

そして、出来はともかくきっちりとこの物語を完結させたのも単純に嬉しかった。

頭の良い奴ならもっと上手い暗号や話の展開を作れたけど、頭の悪い私ではこれが精一杯ですｗｗ

正直言って「けいおん！」なのかも怪しい小説に出来上がってしまいましたが、ここまで読んでくださった読者の皆様に感謝しています。本当にありがとうっ。

また気が向いた時にコッソリと書くと思いますので、その時まではお別れです。それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0775r/

けいおん!!　忘れられた暗号文と宝物

2011年7月14日16時06分発行